

天明三年（一七八三）の冬の初め、農家は取入れを終り一息ついた十月二十七日（旧曆）平洲先生の社会教育講演が養父の玉林斎（今の玉林寺）で開かれるとのおふれがあった。平洲先生といえは天下に聞こえた大学者で、御三家の筆頭尾張の殿様宗睦公の学問の講師を勤め、この五月に開校した藩の学校明倫堂の総裁（後に督学と改められたが今の学長に当る）である。そんな偉い大先生がおらたちに話を聞かせておくれる。

「ありがたいことじゃなあ、ぜひ聞きにいくぞ。」

「どうせむつかしいお話だろうがせめて顔だけ拝んでくるか。」

「平洲さんは平島村の甚十郎さの弟ぼしだけな。あのおとなしい甚さに偉い息子が出来たもんだのう」

などと大層な前評判であった。

当日は午前、午後、夜と三回講演があったが、吉祥院の義瑛和尚は午後の部に出ることにして近所の人たちといっしょに寺を出た。初冬の空は青く澄んで暖かい日ざしが明るい日

だ。玉林斎近くはあちらこちらから集まる人が続いていた。

まだ始まるまでに半刻ほどもあるというのに本堂はほば一ぱいの人で、見ると庭先にもむしるが敷きつめられていた。

「昼間はなあ三千人も来てなあ、こんなことは始めてだとおっさまがびっくりしとらした」

などと話している声を聞いて義瑛さんは急いで本堂に入りやと空いた場所を見つけて席を取った。庭の方が人で埋まったのもそれから間もなかった。

やがて代官の斎藤弥平始め役人たちが着座し、驚いたことに藩のお重役と思われる偉そうな人が乗った。皆目をみはっていたが、義瑛和尚は前に名古屋で見かけたあれは人見弥右衛門様だと気が付いた。当時藩中第一の切れ者という評判の高い人物である。

続いて二人の供を従えて平洲先生が入って来た。人品のよい穏かな顔付の悠然とした態度、年は五十五、六歳であろうか。

話が始まった。

「皆さんよく来て下さったのう。今日はみんなにありがたいお話をして進ぜるつもりだが、はてさてそんなに肩を張って畏まっているは固苦しくて仕方がないわ。まず楽にして聞きなさい。」

となごやかに、大きなしかもよく透る声で一人ひとりに語りかけるような親しみ深い調子で話を進めた。

学問は人間の生きてゆく道を教えてくれる大切なものだが、本を読むことだけが学問ではない。日常生活の中にも学問がある。人の生きる道で最も大切なのはまごころであることなどを、实例を挙げてわかりやすく話した。聴衆はすっかり魅入られたように笑ったり泣いたりして時間の経過を忘れていた。

義瑛和尚は聴衆の中の一人にふと目を止めた。「ほう勘右衛門が来ておる」と思わずつぶやいた。福住村（今の阿久比町福住）の勘右衛門の家はかねてから家族間でもめぐことが絶えず村でも評判になっており、和尚も心を痛めていたのであった。その男が来ている。しかもその態度にはいつもの勘右衛門にない何かがあった。平洲に顔を向けて思いつめた面もちであった。

一刻（二時間）余りで講話は終わった。帰りかける勘右衛門に、和尚は声をかけた、振り向いた彼は、

「あゝ和尚様。今日はありがたいお話聞いて、わしゃ目が覚めました。」

「そうかそりゃよかった。それでな、わしもお前さんに用があるのだがな。」

それから暫くして、名古屋の屋敷にいた平洲のもとへ一通の手紙が届けられた。吉祥院の義瑛からだ。講話の効があつて勘右衛門に改心の様子が見えたので、私も三度足を運びいろいろ相談に乗って話を付け、永年のもめ事も解けて穏便に暮すことになったことが詳細に述べてある。

平洲は早速返書を書いた。

「福住村勘右衛門父子多年不和睦に御座候所、此の間講釈承りに罷出し続き、猶又三度迄御越しなされ御教諭なされ候処伯姪共に承り届き和談に及び候由」とあり、和尚の努力を賞讃した。

この手紙は平洲の講釈に協力して義瑛和尚が教化に努め、藩内の教化活動に成果を挙げた实例を示すものとして貴重な資料である。

平洲は藩内隅なく巡回して講話を続け、明倫堂督学者在任中一といつてもその初期の主として天明年間であつたが一三十万人以上の民衆に接して教化に努めた成果は偉大であつたと評価されている。そこには、わが義瑛和尚のように、平洲の教化活動の趣旨を体してその敷延に力を尽くし、捻りあるものにした有識者たちがあつたことに注意しなければならぬ。

義瑛和尚は寛政五年九月二十九日遷化と寺の過去帳に記さ

れている。

平洲の手紙はいつか流れ出して現在は東海市荒尾町の浄土宗西方寺深谷常玄師が珍藏しておられる。師はこれを三河の西尾で手に入れたとのことである。同寺は細井家の菩提寺であるから、これも仏縁であろう。